

## 元代の「擬蒙漢語」と 現代の青海・甘肅方言 \*

川澄 哲也

### 0 はじめに

中国が蒙古族の強い影響下にあった13-14世紀、統語構造が蒙古語に酷似した漢語、つまり本稿でいう「擬蒙漢語」が一部の文献に書き残された。代表的なものとしては『元典章』『通制條格』『孝經直解』『元朝秘史』『老乞大』<sup>1</sup>などが挙げられる。これら擬蒙漢語に関する研究の歴史は長く、論考も多い。しかし本稿が扱おうとする「擬蒙漢語がいかなる性質の言語であったか」という点については、未だに確定的な説が提出されていない。

本稿では、擬蒙漢語と類似の環境におかれた現代の漢語青海・甘肅方言との類型的比較を通じて、「擬蒙漢語は実在の接触言語であった」と主張する。

### 1 先行研究とその問題点

本節ではまず、擬蒙漢語の性質が先行研究においてどのように考えられてきたのかを概観する。以下に主な研究者の主張を引用する。また主張の際に言及した文献も挙げておく。

---

\* タイトル中の「擬蒙漢語」とは、従来「蒙文直訳体」或いは「漢児言語」と呼ばれてきた漢語のことである。「蒙文直訳体」とは「蒙古語で書かれた法制文書を譯史(翻譯官)が中國語に翻譯する時に用いる文體」(田中(1962:187))、「漢児言語」とは異民族統治下の中国における(漢族を含めた)諸民族の共通語のことを指す(太田(1954)参照)。先行研究では屢々この二つの用語が混同して用いられてきた。しかしこの二種類の呼称は「口語性」という点をめぐって大きく対立しており、一方のみを用いてこれらの漢語全体を指すことは適当でない。本稿では上記二種の呼称を包括する呼称として「擬蒙漢語」という用語を用いる。また、青海・甘肅方言として本稿が扱っているのは、具体的には西寧話、河州話、蘭州話、臨夏話である。

なお本稿は2003年6月日本言語学会第126回大会で行った口頭発表「接触言語としての蒙文直訳体」に加筆修正したものである。発表に際し貴重なコメントをいただいた多くの方々に感謝いたします。

<sup>1</sup> 擬蒙漢語文献の書誌情報については、後に脚注4,6-8にて本稿で扱うものを中心に述べる。

- ・ 太田(1954:22 及び 24)

文献：『(明刊本)老乞大』『孝経直解』『元朝秘史(総訳)』

「(北方諸民族間の:筆者補)当時の共通語であった」

文献：『元典章』『通制條格』『白話碑』

「多分に類型化しており、そのままが口頭語であるとはとうてい考えられない」という条件付きながら「大体において口語に基づいていることは疑ない」

- ・ 田中(1962:187)

文献：『元典章』『孝経直解』『元朝秘史(傍訳)』『白話碑』

「蒙古語で書かれた法制文書を譯史(翻譯官)が中國語に翻譯する時に用いる文體」

- ・ 亦(1982:164)

文献：『元典章』

「不顾汉语固有的语法规律和用语习惯, 径从蒙古语原文机械地翻译过来的公文」(漢語本来の語法・用語法を無視し、蒙古語原文から機械的に翻訳した公文書)

- ・ 橋本(1989:901)

文献：『孝経直解』『元典章』『元朝秘史(総訳)』

「ほぼ、元代の口語に近いものであったと判断される」

- ・ 宮(2002:175)

文献：『孝経直解』『(元刊本)老乞大』

「モンゴルが意識的に作り出した書面上の文體である」

以上より、擬蒙漢語の性質に関しては、「実際に使用されていた言語」という意見と、「蒙古語文書を翻訳するための文体」という二つの見解が対立していることがわかる。先行研究において意見が一致しなかった要因としては、次の二点が考えられる。

- ① 語学的見地からの論拠が提出されてこなかった<sup>2</sup>。
- ② 標準的な漢語との比較しかなされてこなかった。

この問題点を解決するために、本稿では比較対象に現代の漢語青海・甘肅方言を用いる。この方言は古くから蒙古語系、或いはチベット語系の言語と接触を繰り返しており<sup>3</sup>、擬蒙漢語との比較には最適の漢語であると考えられる。

## 2 現代の青海・甘肅方言から見た擬蒙漢語

本節では擬蒙漢語と青海・甘肅方言の比較を行い、両言語に共通の言語変容が起きていることを示したい。

### 2.1 SOV 型の漢語

標準的な漢語の語順は SVO 型である。しかし本稿で扱う二種類の漢語は、標準漢語とは異なる様相を呈している。以下、それぞれについて述べる。

#### 2.1.1 擬蒙漢語

擬蒙漢語の最大の特徴は、通常の漢語と比べて、非常に多く OV 型の文を用いる点にある。以下に例文を挙げるが、目的語に下線、動詞に二重線を付す。

- (1) 百姓每女孩兒與了有。「民衆達は娘を与えている。」(『通制條格』<sup>4</sup> 3-24a-7)
- (2) 如今你母親、兄弟行尋去。「今、お前の母親、弟を捜しに行け。」(『元朝秘史』<sup>6</sup> 卷二(87))

<sup>2</sup> 先行研究においては擬蒙漢語の性質について、多くは論文の冒頭にていわば「前提条件」のように記述され、何らの論拠も示されることはなかった。唯一太田(1954:22)では「もしいわゆる蒙古語直訳体なるものが単なる翻訳の一過程としてのみ存在したものであるならば、『孝經直解』のようなものがなぜ刊行されたか説明することはできない」と述べる。つまり元来より『孝經』は漢語の文献なのだから、その口語訳版である『孝經直解』に用いられた言語は蒙古語翻訳用の言語たり得ないという論旨である。しかし宮(2002)が指摘するように、『孝經直解』以前にも蒙古語訳『孝經』は出版されており、『孝經』→蒙古語訳『孝經』→『孝經直解』という重訳過程も想定可能であるため、論拠としては弱いと言わざるを得ない。

<sup>3</sup> 付録2の言語地図も参照。

<sup>4</sup> 元代に編纂された判例集。全30巻だが1, 10~12, 23~26巻を欠く。吏読体漢語(法制文書用の漢語)で記された文書の他、全体のおよそ3割にあたる約200の文書が擬蒙漢語によって書かれている。また本稿では扱わないが、先に挙げた『元典章』もこの『通制條格』と類似の文献であり、両文献に共通して収録される文書も多い。なお括弧内で後続する数字は、用例の出現箇所を、巻数・葉数・表 a 裏 b 行数の順に記してある。

<sup>5</sup> 例文(2)で用いられる「行」は後置要素。詳しくは2.2.1で後述する。

<sup>6</sup> チンギス・ハンの一代記。全12巻。漢字による蒙古語音写部分と漢語による傍訳(=逐語訳)、総訳(=抄訳)からなる。特に断らない限り、本稿において『元朝秘史』と言った場合、

- (3) 心裏一般愛有。「心には同様に愛がある。」(『孝経直解』<sup>7</sup> 4a-7)  
 (4) 俺自穿的不是。「俺が自分で着るんじゃない。」(『老乞大』<sup>8</sup> 26b-10(73))

例文(1)(2)ではいずれも、目的語が動詞に先行している。例文(3)も、漢語としては珍しい語順である。また例文(4)のように、動詞がコピュラの場合であっても OV 語順になることがある。

## 2.1.2 青海・甘肅方言

続いては青海・甘肅方言についてである。

青海方言他動詞文の基本語順について、程(1980:142)は以下のように述べている。

「“賓—動”式是青海方言句法的一种基本格式，它不象在普通话里作为“变例”出现。」(“目的語—動詞”語順は青海方言統語法の基本形であり、それは標準語において“変例”として出現するのとは異なる。)

また賈(1990:37)でも次のようにいう。

「它的基本词序是 SOV 式。」(その(=青海・甘肅方言:筆者補)基本語順は SOV 型である。)

以下に例文を挙げる<sup>9</sup>。目的語に下線、動詞に二重線を付す。

- (5) s<sub>1</sub>/2 tçiã/1 no/3 mǎ xa<sup>10</sup> pu/4 tǔ/3. (Q<sup>11</sup>)

( 時 間 我 們 哈 不 等 。 )

「時間は我々を待たない。」(程(1980))

漢語総訳部分を指す。括弧内で巻数に後続する数字は、小澤訳(1997)及び Cleaves(1982)で用いられる節数を表す。

<sup>7</sup> 戦国時代に著された『孝経』を、元代のウイグル人貫雲石が擬蒙漢語を用いて書き改めた文献。量的には15葉と少ない。括弧内には用例の出現箇所を、葉数・表 a/裏 b-行数の順に記してある。

<sup>8</sup> 高麗王朝の通文館(後の司訳院)で編纂された漢語の教科書。これまでは明刊本が知られていたが、前世紀末、韓国で元刊本が発見された。本稿では元刊本を用いた。全40葉。括弧内に用例の出現箇所を、葉数・右 a/左 b-行数の順に記してある。またその後ろの括弧内には、金他訳注(2002)では第何話にあたるかを記した。

<sup>9</sup> 例文は漢字音と漢字表記とを併記する。青海方言の漢字音は西寧音を採用し、漢字表記と共に張編(1994)に依拠した。甘肅方言の漢字音は蘭州音を採用し、漢字表記と共に王・趙編(1997)に依拠した。「/」の後の数字は声調を示す。音調はそれぞれ次の通り。青海方言: 1=/44/, 2=/24/, 3=/53/, 4=/213/, 甘肅方言: 1=/31/, 2=/53/, 3=/442/, 4=/13/。声調が付されていない場合は轻声である。なお漢字音の表記は一部簡略化してある。

<sup>10</sup> [xa](「哈」)は目的語に付される後置要素である。詳しくは2.2.2以降を参照。

<sup>11</sup> 括弧内のQは青海方言の、Gは甘肅方言の用例(或いは漢字音)であることを示している。

(6) no/3 ne/3 ts'a/2 xuo/1 lio. (Q)

( 我 奶 茶 喝 了 。 )

「私は乳茶を飲んだ。」(贾(1990))

(7) ni/3 xo/3 xo/3 tsɿ fɯ/1 niä/4. (Q)

( 你 好 好 地 书 念 。 )

「しっかり勉強しなさい(本を読みなさい)。」(Dede(1999b))

(8) və/3 tien/4 in/3 p'io/4 me/3 xa lo. (G)

( 我 电 影 票 买 下 了 。 )

「私は映画のチケットを買った。」(谢他(1996))

(5)-(8)いずれの例文においても目的語は動詞に先行しており、SOV 型の語順になっている。冒頭で述べたように、青海・甘肅方言は多くの言語と接触している。青海・甘肅方言の基本語順が SOV 型であることは、それら他言語の基本語順がいずれも SOV 型であることと無関係ではないだろう。

一方、標準漢語と同じ SVO 型の文は青海・甘肅方言にも見られ、近年若年層を中心に多く用いられているようであるが、李炜(1993)が行った社会言語学的調査によれば、青海・甘肅方言の話者が最も当該方言的であると感じる語順は、やはり SOV 型であるという。

### 2.1.3 小結・SOV 型の漢語

先行研究においては屢々、擬蒙漢語に SOV 語順の文が多く見られることに關して、それは蒙古語直訳に起因した現象であると主張されてきた。しかし青海・甘肅方言における構造変化の事例を見ると、擬蒙漢語のような SOV 型の漢語が言語接触の結果発生し、元朝時代に実際に使われていたと考えることは可能であろう。

## 2.2 後置要素の使用

漢語は通常、介詞(=前置詞)、或いは語順によって格標示を行う。しかし、前節で述べたような SOV 型の文を多用する擬蒙漢語及び青海・甘肅方言では、後置要素による格標示が行われる場合がある。以下、便宜的に蒙古語の格体系(与位格・対格・奪格・造格・共同格)に基づき、それぞれの格標示を行う後置要素について見ていく。以下の例文で□で囲ったものが後置要素である。

## 2.2.1 擬蒙漢語<sup>12</sup>

### ●与位格

- (9) 大醫<sup>根底</sup>重重的酬謝也。「お医者様に厚くお礼しましょう。」  
(『老乞大』30b-9(84))
- (10) 金國皇帝<sup>行</sup>奏知。「金国の皇帝に知らせよう。」(『元朝秘史』卷四(134))
- (11) 遠田地<sup>裏</sup>去呵、「遠方に行っても、」(『孝經直解』14a-10)

目的語が場所の場合は「裏」、場所以外の場合は「根底」「行」等が用いられ、後置要素の使い分けが行われる。「行」は『元朝秘史』で多用される。

### ●対格

- (12) 女孩兒<sup>根底</sup>水裏撒的人每、「女兒を水中に捨てた人々は、」  
(『通制條格』4-22b-4)
- (13) 兒子每<sup>行</sup>疾快喚覺起来。「子供達を早く起こせ。」(『元朝秘史』卷二(99))

対格後置要素としては「根底」「行」が多用される。但し目的語が無生物である場合、後置要素による格標示は行われにくく<sup>13</sup>、大凡は語順、或いは介詞(「將」「把」)によって標示される。

### ●奪格

- (14) 我一箇肚皮<sup>裏</sup>生的。「私の一つのお腹から生まれたのだ。」  
(『元朝秘史』卷一(22))
- (15) 百姓每<sup>根底</sup>不揀甚麼科要有。「民衆達からあらゆる物を徴収している。」  
(『通制條格』2-29a-8)

但し時間的な奪格表現の場合、後置要素が使われることはない。

### ●造格

- (16) 托著哥哥每福陰<sup>裏</sup>、「兄貴達の恩恵によって、」(『老乞大』37b-9(102))
- (17) 鋪馬<sup>裏</sup>送皂鷹的、「駅伝馬で黒鷹を送る者は、」(『通制條格』27-9a-3)

<sup>12</sup> 付録1「擬蒙漢語文献毎の格標示法一覧」も随時参照されたい。

<sup>13</sup> 目的語が無生物の場合、後置要素による格標示は『通制條格』に3例あるのみである。

例文(16)では「介詞(「托著」)+目的語+後置要素」という珍しい構造が用いられている。なお例文(17)のような「裏」のみによる造格標示は、『通制條格』にしか見られない特徴である。

●共同格

(18) 與西相<sup>根底</sup>商量者。「西相と協議せよ。」(『通制條格』3-5b-7)

(19) 與兄察阿歹<sup>處</sup>商議。「兄チャガタイと協議せよ。」(『元朝秘史』卷続二(279))

後置要素による共同格標示の用例数は比較的少ない。

## 2.2.2 青海・甘肅方言

本節では、2.2.1 に対応させる形で、青海・甘肅方言における後置要素について記述する。

●与位格

(20) no/3 ni/3 <sup>xa</sup> i/1 pə/3 fu/1 ki/4 lio. (Q)

(我 你 <sup>哈</sup> 一 本 书 给 了。)

「私は君に一冊本をあげた。」(贾(1991))

(21) və/3 a/1 kə/1 <sup>xa</sup> ɕiə/3 kə ɕin/4. (G)

(我 阿 哥 <sup>哈</sup> 写 个 信。)

「私は兄に手紙を書いた。」(李炜(1993))

(22) ni/3 ɕi/1 niə/2 <sup>xa</sup> po/4<sup>14</sup> tɕ'y/4 … (Q)

(你 西 宁 <sup>哈</sup> 去 …)

「君は西寧に行くな…」(王・吴(1981))

例文(20)と(22)を比較すればわかるように、青海・甘肅方言の後置要素[<sup>xa</sup>]は目的語が人を表す語・場所を表す語のいずれであっても用いることができる。

●対格

(23) t'a/1 <sup>xa</sup> və/3 tɕ'yen/4 lo pen/4 t'ien/1. (G)

(他 <sup>哈</sup> 我 劝 了 半 天。)

「彼を私は長い間説得した。」(马(1982))

<sup>14</sup> [po/4](「去」)…禁止を表す。標準語の「不要」「別」に相当する。

(24) tien/4 ʂʌ/4 [xa] k'en/4 ti ʂʌ/2 xou/2 tɕia/1<sup>15</sup> le/2 lo. (G)

( 电 视 [哈] 看 的 时 候 家 来 了 。 )

「テレビを見ていた時、彼が来た。」(李炜(1993))

(25) ia/2 kuã/1 tsɿ/3 tɕuã/3 tɕe/3, fã/4 [a]<sup>16</sup> tɕʌ/1 pu tɕʌ/2. (Q)

( 牙 关 子 肿 者, 饭 [啊] 吃 不 成 。 )

「歯茎が腫れて、ご飯を食べられない。」(張編(1994))

対格の後置要素にも[xa]が用いられる。目的語が人であっても物であっても[xa]は付加することができる。

#### ●奪格

(26) t'a/3 pə/4 tɕin/1 [ta] xuei/4 le/2 lo. (G)

( 他 北 京 回 来 了 。 )

「彼は北京から戻ってきた。」(馬(1984))

(27) ɤxu<sup>17</sup> [ta] t'a/3 tse/4 pu/4 fo/1 xua/4 lio. (Q)

( 他 再 不 说 话 了 。 )

「その時から彼は話さなくなった。」(賈(1991))

青海・甘肅方言の奪格後置要素の[ta]<sup>18</sup>は、場所的・時間的奪格を問わず用いることができる。

#### ●造格

(28) tɕia/1 te/4 mo/2 pi/1 [lia] ɕie/3 tsɿ/4 tɕe. (Q)

( 家 逮 毛 笔 [啊] 写 字 者 。 )

「彼は筆によって字を書く。」(張編(1994))

(29) ni/3 k'ue/4 tsɿ [la] tɕʌ/1. (G)

( 你 筷 子 [啦] 吃 。 )

「君は箸で食べる。」(李炜(1993))

<sup>15</sup> 青海・甘肅方言においては三人称代名詞として、[t'a/3](「他」)と[tɕia/1](「家」)が同様に用いられる。

<sup>16</sup> 李克郁(1987)によると、青海方言の一部では[xa]を[a]と発音するという。そのため[a]は[xa]の異形態と考えられる。

<sup>17</sup> 賈(1991)では[ɤxu]に「那时(その時)」と訳が付けられている。漢字表記はない。

<sup>18</sup> 奪格後置要素としては他に、李克郁(1987)に[sa]、Dede(1999a)に[tɕia]という音形が報告されている。先行研究では[ta]に漢字表記は与えられていない。

造格後置要素としては青海方言では[lia]、甘肅方言では[la]が用いられる。また青海方言では(28)のように介詞[te/4]を併用する用例もある<sup>19</sup>。この構造は擬蒙漢語の例文(16)と共通している。

●共同格

(30) ni/3 fi/2 [lia] i/1 tɕ'u/3 e le/2 lio? (Q)

( 你 谁 [啊] 一 处 儿 来 了? )

「君は誰と来たの?」(都(1995))

(31) i/4 kə/4 ka/3 tɕ'i/4 tɕ'ə/1 [la] i/4 kə/4 ta/4 k'a/3 tɕ'ə/1 [la]

( 一 个 尕 汽 车 [啦] 一 个 大 卡 车 [啦]

p'en/4 xa ti/2 ts'en/2 ti/2 xən/3. (G)

碰 下 得 惨 得 很 。 )

「小さな車と大きな車とが激しくぶつかった。」(李炜(1993))

造格同様、共同格の後置要素も青海方言では[lia]、甘肅方言では[la]が用いられる。造格と共同格に同じ形態素を用いる現象は周辺言語では土族(モンゴル語)、保安(バオアン)語と共通する<sup>20</sup>。さらにその音形は土族語格語尾の音形([la])と似ている。

### 2.2.3 小結・後置要素の使用

以上見てきたように、擬蒙漢語と青海・甘肅方言では共通して、後置要素による格標示が行われている。「擬蒙漢語=翻訳用文体」を主張する先行研究においては、これら後置要素は蒙古語原文の格語尾を漢語に置き換えたものとみなされてきた。しかし青海・甘肅方言の言語変容の事例をみると、後置要素を使用する漢語が元朝時代、実際に使われていたと考えることも十分可能である。

但し両言語の後置要素の用法には差異も見られる。これらの差異が何に起因しているのかについては、今後考えていく必要がある。

### 2.3 否定辞の語順変化

標準漢語では否定辞を他の副詞、動詞と併用する場合、語順は「否定辞+副詞+動詞」となる。しかし本稿で扱う二種の漢語には共通して、「副詞+否定辞+動詞」という構造が確認できる。以下それぞれの漢語について見ていく。□で

<sup>19</sup> 都(1995), p.57.

<sup>20</sup> 但し土族語の場合、方言によっては造格語尾 -ra, 共同格語尾 -la のように、多少音形が異なる場合もある。角道(1990), p.181 参照。

囲ったものが否定辞である。

### 2.3.1 擬蒙漢語

擬蒙漢語における否定辞の位置は、標準的な漢語と同じくおおよそ(32)(33)のように、その他の副詞や修飾語より前置される。

(32) 八忽歹管着的探馬赤每，不好生的整治，…「八忽歹が管理している探馬赤達は、しっかりと治めず、…」(『通制條格』16-19b-3)

(33) 休那般説。「そう言うな。」(『老乞大』8a-8(19))

しかし動詞や形容詞の直前に否定辞が使われている用例も数例発見された。

(34) 咱每根底不呈獻、明白不奏了，休與人者。「我らに上奏せず、明白に奏することなしには人に与えるな。」(『通制條格』27-1a-3)

(35) 擅自休斷者。「勝手に断じるな。」(『通制條格』28-7b-3)

(36) 父母但有不是處呵，急くの索苦諫了着，這般不諫，則管順着錯處行呵，…「父母に過ちがあればすぐに根気強く諫めるべきで、そのように諫めないでただ誤ったまま事をはこぶにまかせたのなら、…」(『孝經直解』13a-4)

(37) 你底似的休早行。「そんなに早く行くのは止しなさい。」(『老乞大』8a-4(19))

(38) 恁底似的休多索<sup>21</sup>。「あんまり多く求めるな。」(『老乞大』23a-3(62))

例文(34)(35)では、副詞「明白」「擅自」は否定辞に先行しているが、実際には「不」「休」によって動詞「奏」「断」と共に否定される。例文(36)は「そのように諫める」ことを否定する文脈であり、「否定辞」+「這般諫」のような語順が期待される。例文(37)(38)については、金他訳注(2002:85)でも指摘されるように、それぞれ「休底似的早行」「休底似的多索」となるべきである<sup>22</sup>。

<sup>21</sup> 十五世紀末から十六世紀初めに改訂された『老乞大』(以下「明刊本『老乞大』」)では「你不要十分多討」のように、否定辞「不要」(元刊本の「休」にあたる)と副詞「十分」(元刊本では「底似的」)の位置が元刊本『老乞大』と逆に書き換えられている。

<sup>22</sup> 『元朝秘史』にも動詞の直前に否定辞が置かれる用例はみられた。

・這話你再休説。「この話はもうするな。」(巻七(190))

・你若勝我時，倒了處再不起。「お前が勝てば私は倒れた場所から立ち上がるまい。」(巻統一(254))

本来は「休再説」「不再起」のような語順が期待される。但し副詞「再」の場合、「再+否定辞」の語順で「二度と～ない」のように強調を表す用法があり、統語論上この構造に問題は無い(但し対応する蒙古語原文に強調のニュアンスは特には含まれていない)。

### 2.3.2 青海・甘肅方言

続いて本節では、青海・甘肅方言における否定辞の位置について述べる。以下に例文を挙げる。

- (39) no/3 tsɿ/3 ɕi/4 mo/2 k'ä/4 ku/4. (Q)  
 ( 我 仔 细 没 看 过 。 )  
 「私は詳細には見ていない。」(張編(1994))
- (40) t'a/3 tɕ'õ/2 tɕ'õ/2 nã/4 sɿ/2 pu/4 ɕõ/4 pã/1. (Q)  
 ( 他 常 常 按 时 不 上 班 。 )  
 「彼はよく時間通りに出勤しない。」(張編(1994))
- (41) t'ia/1 tɕ'i/4 xu/2 tu/3<sup>23</sup> pu/4 zɛ/1. (Q)  
 ( 天 气 胡 哪 不 热 。 )  
 「天気はとても暑いわけでもない。」(張編(1994))
- (42) tɕuõ/1 tsɿ ! to/4 lio xo , tse/4 po/4 tɕ'õ/4. (Q)  
 ( 庄 子 里 到 了 哪 , 再 套 唱 。 )  
 「村に着いたらもう歌うな。」(程(1980))
- (43) xo/3 xo/3 pu/4 ken/4 xuə/2 , luen/4 p'o/3 sa/4 li. (G)  
 ( 好 好 不 干 活 , 乱 跑 啥 哩 。 )  
 「しっかりと働かないでどうしてむやみに出歩くのか。」(王・趙編(1997))

(39)(40)は標準漢語では次のように、「否定辞+その他の副詞」という語順をとらなければならない。

(39)' 我没仔细看过。 (40)' 他常常不按时上班。

また(41)のような構造の文は標準漢語でも用いる(i.e. 「天气很不热」)が、その場合「天気は全く暑くない」のように全部否定となる。一方、青海方言の例文(41)は部分否定である。

これらの用例からわかるように、青海・甘肅方言の否定辞は動詞の直前に用いられる。青海・甘肅方言の否定辞は例外なくこのような位置に現れる<sup>24</sup>。

<sup>23</sup> [xu/2 tu/3](「胡哪」)…非常に、とても。標準語の「很」にあたる。

<sup>24</sup> 程(1980), pp.145-147, 王・趙編(1997), p.86.

### 2.3.3 小結・否定辞の語順変化

前節で述べた青海・甘肅方言の否定辞の位置の変化には、周辺言語の影響が考えられる<sup>25</sup>。以下の例文は蒙古語系言語の用例である。

- (44) tɕə xauu bii gule!  
君 でたらめに ~するな 言う 「でたらめを言うな。」
- (45) tɕŋgə bii gə!  
そのように ~するな する 「そのようにするな。」  
(土族語(用例は照那斯图編著(1981)より))
- (46) tɕi godzənə tɕmɪŋgə dzigan təgə ndziə!  
君 自分 そのように 小さい ~するな 見る  
「自分をそのようにさげすむな。」(保安語(布・刘編著(1982)より))
- (47) bi pusə ulɪə ətʃuɪnə.  
私 再び ~ない 行く 「私はもう行かない。」
- (48) funiəyən baogu idziələ pusə ulɪə irənə.  
狐 玉蜀黍 食べる 再び ~ない 来る  
「狐はもう玉蜀黍を食べに来なかった。」(東郷語(刘編著(1981)より))

例文(44)-(48)からわかるように、周辺言語においては、否定辞は動詞・形容詞と緊密に結びつき、その他の程度副詞や修飾語は否定辞よりも前に置かれている。つまり青海・甘肅方言と同じ位置に用いられる。

先行研究では、擬蒙漢語において否定辞の位置が変化している用例について、蒙古語直訳の結果であることが多かった。しかし青海・甘肅方言の事例を考慮すると、このような漢語が元朝時代、実際に使われることもあったと解釈できる。但し擬蒙漢語において否定辞の語順が変化するのは動詞を否定する場合のみである。

### 2.4 存在動詞「有」の特殊用法

標準漢語の存在動詞には「有」と「在」の二種類があるが、それぞれは文の構造により以下のA/Bのように使い分けられる。

- A. 「場所語」+ 有 + 「存在の主体」(「存在の主体」=不定・未知)  
e.g. 那里有十来个人。「あそこに十人くらい居る。」

<sup>25</sup> 程(1980), pp.145-147, 贾(1990), pp.41-43. 程(1980:146)では「明显地是受了藏语词序规则的影响」と、チベット語の影響を考えている。

B. 「存在の主体」 + 在 + 「場所語」 (「存在の主体」 = 特定・既知)

e.g. 她在那里。「彼女はあそこにいる。」

しかし、SOV 語順を多用する擬蒙漢語及び青海・甘肅方言ではこの構造的区別が失われるため、存在表現を行う際、動詞「有」を場所語に後置するという「有」の特殊な用法がある。以下それぞれの漢語について実例を見てみたい。

#### 2.4.1 擬蒙漢語

- (49) 火兒赤也這裏有。「火児赤もここにいる。」(『通制條格』2-27b-9)  
(50) 未知帖木真他家裏有無。「テムジンが家にいるかいいないか知らない。」  
(『元朝秘史』卷二(100))  
(51) 我的妻子見在皇帝父親處有。「我が妻子は現在、皇帝なる父の許にいる。」  
(『元朝秘史』卷六(183))  
(52) 井在那裏有。「井戸はどこにある。」(『老乞大』9a-10 (23))  
(53) 恁都則這裏有者。「お前たちはここにいなさい。」  
(『老乞大』25a-6 (68))  
(54) 你都這裏有者。「お前はここにいなさい。」(『老乞大』25b-6 (69))

(49)(50), (53)(54)の「有」は特殊な用法である<sup>26</sup>。また例文(51)(52)ではすでに動詞「在」が用いられているため、文末の「有」は本来不要である<sup>27</sup>。

#### 2.4.2 青海・甘肅方言

青海・甘肅方言にも、特殊な用法の「有」(Q[iu/3]・G[iou/3])が時折見られる。

- (55) ts'uõ/1 tşõ/3 a/1 ! iu/3 lia<sup>28</sup>? (Q)  
( 村 長 阿 里 有 啊 ? )  
「村長はどこにいるか?」(張編(1994))  
(56) tşõ/4 xo/3 no/3 ne/4 tşã/3<sup>29</sup> iu/3 lia. (Q)  
( 正 好 我 奈 扎 有 啊 。 )  
「丁度私はここにいる。」(張編(1994))

<sup>26</sup> 明刊本『老乞大』では(53)は「你都只這裏等候着。」、(54)は「你都這裏等候着。」と、動詞が「有」から「等候(待つ)」に書き換えられている。

<sup>27</sup> 例文(52)は、明刊本『老乞大』では「那裏有井。」と書き換えられている。注26,27の事例より、これら「有」の用法が元代特有のものであったことがわかる。なお、動詞「在」と「有」の併用については後に3.2にて議論する。

<sup>28</sup> 文末に用いられた[lia](「啊」)は語気詞。

<sup>29</sup> [ne/4 tşã/3](「奈扎」)…そこ、あそこ。

(57) ni/3 tɕʌ/4 e<sup>30</sup> mo/2 iu/3 xo<sup>31</sup>, no/3 i/3 tɕʌ/4 e pu/4 le/2. (Q)  
 ( 你 致 儿 没 有 喘 , 我 也 致 儿 不 来 。 )

「君がそこにいないなら私もそこに行かない。」(敏(1989))

(58) ni/3 iou/3 ɕʌ/4<sup>32</sup>, zʌ/4 tsɿ xo/3 t'uei/1. (G)  
 ( 你 有 是 , 日 子 好 推 。 )

「君が近くにいてはじめて日々を良く過ごせる。」(谢他(1996))

また擬蒙漢語の例文(51)(52)のように、「在」と「有」が併用されている用例も確認できた。

(59) tɕu/3 ɕi/2 tse/4 xu/4 tɕ'e/1 ɕʌ/4 | mo/2 iu/3. (Q)  
 ( 主 席 在 候 车 室 里 没 有 。 )

「議長は待合室にいない。」(Dede(1999a))

#### 2.4.3 小結・存在動詞「有」の特殊用法

以上見たように、SOV 型の文を頻用する両言語に共通して動詞「有」の特殊用法が確認できた。擬蒙漢語の例文(49)(50)(53)(54)のような「有」の特殊用法は先行研究において、「ある／いる」に同じ動詞を用いる周辺言語の影響を受けた、「有」と「在」の混用であると考えられてきた。しかしこのような現象が起こるのは語順が SOV 型の時だけであり、加えて文末に「在」を用いることはない。そのため「有」と「在」の混用と見るよりは、語順変化に起因する「有」の特殊用法と解釈するほうが妥当であろう。

#### 2.5 複数標識の用法拡大

本節では、擬蒙漢語と青海・甘肅方言に見られる、複数標識の特殊用法について取り上げる。議論の前提としてまず、標準漢語における複数標識の用法について述べておく。

現代の標準漢語には複数を表す要素として、「們」がある。しかしその用法には制限があり、人称代名詞や人を指す名詞にしかつけることができない。

e.g. 「我們」「老師們」「\*馬們」「\*花們」

<sup>30</sup> [tɕʌ/4 e] (「致儿」)…ここ。

<sup>31</sup> 句末に用いられた[xo] (「喘」)は假定等の語気を表す。張編(1994), p.17 参照。

<sup>32</sup> 王森(1991)によると、甘肅方言では[ɕʌ/4] (「是」)が句末に用いられ、假定の語気を表す場合があるという。

### 2.5.1 擬蒙漢語

元代漢語における複数標識には「毎」があり、その用法には現代語の「們」と同じ制限がある。しかし擬蒙漢語文献にはこの制限から逸脱した用法の「毎」も数例見られる。以下、用例を挙げる(後続[ ]内は和訳)。

- ・『通制條格』

民田[民營の田畑]毎(3-1a-3) 那裏[そこ]毎(27-17b-6, 28-11a-3)

柴炭[薪炭]毎(27-22b-1) 星曆文書毎(28-30b-5)

- ・『元朝秘史』

驢馬[去勢馬]毎(卷六(181))

- ・『老乞大』

頭口[家畜]毎(5b-7(13), 6a-5(14)etc.) 馬毎(7b-2(18), 9a-10(23)etc.)

狗[犬]毎<sup>33</sup>(15b-9(42))

### 2.5.2 青海・甘肅方言

青海方言の複数標識「們」([mã])について、張編(1994:180)には次のような記述がある。

- ・「用在人称代词、指人、指物的名词后面表示复数。」(人称代名詞，人，物を指す名詞の後ろに用いられ、複数を表す。)

用例として、次のようなものが挙げられている<sup>34</sup>。

[tʂuõ/1 tɕia/1 mã] [ku/3 ua/4 mã] [tʂuo/1 tsɿ mã]

( 庄 稼 們, 狗 娃 們, 桌 子 們 )

また李克郁(1987)にも次のような用例がある。

[nio/3 e mã] [y/2 e mã] [xua/4 mã] [a/1 tʂa/3 mã]

( 鸟 儿 們, 鱼 儿 們, 话 們, 阿 扎 們<sup>35</sup> )

また王・趙編(1997)には甘肅方言の「們」([mən])はあらゆる名詞に付加することができる」と記述され、次のような用例があげられている。

[xua/1 u mən] [xua/4 mən] [to/1 mən]

( 花 儿 們, 话 們, 刀 們 )

<sup>33</sup> 明刊本『老乞大』では「狗子」と書き換えられている。

<sup>34</sup> [mã]が付されている名詞の意味はそれぞれ、[tʂuõ/1 tɕia/1]=農作物、[ku/3 ua/4]=子犬、[tʂuo/1 tsɿ]=机 である。

<sup>35</sup> [a/1 tʂa/3]…どこ。次のような例文中に用いられている：

・ ni/3 a/1 tʂa/3 mã tɕ'y/4 ku ?

( 你 阿 扎 們 去 过 ? ) 「あなたはどこどこに行ったことがあるの?」

このような「們」の用法は標準漢語には見られず<sup>36</sup>、青海・甘肅方言の特徴であるといえる。

### 2.5.3 小結・複数標識の用法拡大

上で見た複数標識の用法拡大にも、周辺言語の影響が考えられる。ここでは蒙古語、保安語、東郷語、土族語の複数標識について用例をあげる。

- ・蒙古語… ‘-ɑ:d, -u:d’

xuuxad(子供)-u:d xœn(羊)-ɑ:d ger(家)-u:d (道布編著(1983))

- ・保安語… ‘-lə’

iadzĩ(子供)-lə fgor(去勢牛)-lə çile(机)-lə (布・刘編著(1982))

- ・東郷語… ‘-la’

kun(人)-la mori(馬)-la şurə(机)-la (刘編著(1981))

- ・土族語… ‘-sge’

kun(人)-sge mori(馬)-sge çiree(机)-sge (照那斯图編著(1981))

上例からわかるように、いずれの言語においても、これら複数標識は先行する名詞の有生・無生にかかわらず付加することができる。

擬蒙漢語「毎」の特殊な用例について、田中(1962:217)は『「毎」の濫用』直譯體における、機械的操作の無神経さを物語る」と記述し、蒙古語を直訳した結果現れたものと考えている。しかし2.5.2 でみたように、複数標識の特殊な用法をもつ漢語が実在しているため、このような「毎」が実際に用いられていた可能性も考えられる。但し青海・甘肅方言の複数標識があらゆる名詞に付加可能であったのに対し、擬蒙漢語では無生物名詞に「毎」を付加する用例は『通制條格』にしか見られない。「毎」の使用範囲については今後も考えていきたい。

### 3 同時代資料から見た擬蒙漢語

本節では青海・甘肅方言との比較から離れ、擬蒙漢語の同時代資料であるカラホト文書の漢語、及び『元朝秘史』原文と総訳との対応関係に基づいて、擬蒙漢語の性質を再考する。本稿で言及するカラホト文書はいずれも家族間でやりとりされた私信の類であり、蒙古語からの翻訳という過程は想定できない。

<sup>36</sup> 標準語でも「星星們」のような用法が擬人的に用いられることはある。ただしそれは文学作品中に限られる。

### 3.1 後置要素の使用

まずはカラホト文書<sup>37</sup>からの用例である。

(60) 他根底執伙者。「彼に食事を出しなさい。」

(61) 普福法師处帶了酒棗兒二升。「普福法師に酒棗を二升持っていく。」

例文(60)(61)では共に、擬蒙漢語と共通の後置要素「根底」「处」が用いられている。

また『元朝秘史』の原文と総訳を比較したところ、次のような対応例が発見された。

#### 蒙古語原文・漢語傍訳

görö'esün abala'asu

野獸 打圍呵

yeke üiyile tušisu

大 勾當 委付

→

#### 漢語総訳

野獸行打圍呵

「野獸を行って獲るならば、」(巻三(123))

大勾當裏可以委付

「大きな仕事に任命しよう。」(巻七(197))

上の二例では、蒙古語原文には格語尾が用いられておらず、それ故、傍訳にも「行」「裏」は付されていない。しかし総訳には後置要素「行」「裏」が用いられている。この後置要素については「蒙古語の翻訳」という考えは適用できない。この事例から、『元朝秘史』の訳者の言語にこのような後置要素の用法があったと考えることができる。

### 3.2 存在動詞「有」の特殊用法

2.4.1 では存在動詞「在」と「有」の併用について言及したが、カラホト文書<sup>38</sup>にも次のような用例が見られた。

(62) 姨孃已在張沙刺城外有里<sup>39</sup>…「おばさんも既に張沙刺城の外にいる」

この「有」は例文(51)(52)同様、本来は不要なものである。このような動詞「在」「有」の併用は、蒙古語の存在表現の影響を受けたものと考えられる。

蒙古語の存在表現は、次のようになされる。

・ Tai-du-da bugüi-dür bičibei. (1312 年登封県少林寺聖旨碑蒙古語面より)

大 都 に いる 時に書いた

<sup>37</sup> (60)は李逸友編著(1991), p.191[F197:W27]、(61)は同書 p.192[F249:W19]より。

<sup>38</sup> 李逸友編著(1991), p.191[F197:W27]参照。

<sup>39</sup> この「里」は語気詞であろう。

つまり、漢語では動詞「在」一語で表現されるところが、蒙古語では与位格語尾(-da)と存在動詞(bü-)を用いるのである。そして例文(51)(52)では、本来は動詞であった「在」が、蒙古語与位格語尾の影響を受けた結果、同形の介詞「在」として解釈され、蒙古語存在動詞に対応する形でさらに漢語「有」が用いられていると考えられる。つまり、以下のような対応関係である。

擬蒙漢語：「在」＋目的語＋「有」

蒙古語： 目的語＋与位格語尾＋存在動詞

同様の指摘はすでに田中(1962)にも見られる。田中(1962)ではこの現象を翻訳上の問題として扱っている。しかしカラホト文書においても例文(62)で同様の構造が用いられている。この事実を考えると、(51)(52)に見られる擬蒙漢語の「在」と「有」の併用も、実際に行われていた可能性が高いといえる。

#### 4 結語

本稿では、元代の特定の文献に見られる「擬蒙漢語」という漢語の性質について、現代の漢語青海・甘肅方言との類型的比較を通じて考えた。その結果、以下の数点の構造変化が両言語に共通して起きていた。

- ・標準的な漢語には見られない SOV 語順の文が多く用いられている。
- ・後置要素による文法格標示がなされる。
- ・「介詞＋目的語＋後置要素」という構造が見られる。
- ・否定辞と他の副詞とが共出する場合、否定辞が動詞の直前に用いられる。
- ・存在動詞「有」が特殊な用法をもつ。
- ・複数標識を、人以外を表す名詞にも付加することができる。

上記の諸現象はいずれも、周辺言語との接触の結果起きた言語変容であると考えられる。これらの事例に加え、第3節であげた同時代資料による直接的証拠をあわせ考えると、擬蒙漢語のような特殊な構造をもった漢語が元朝時代、実際に用いられていたと考えることができる。但し細かく見れば擬蒙漢語と青海・甘肅方言の間には相違点もある。これらをどう解釈すべきかは、今後の課題としたい。

## 参考文献

- 布和·刘照雄編著(1982)『保安语简志』民族出版社.
- 程祥徽(1980)「青海口语语法散论」『中国语文』1980-2, pp.142-149.
- Cleaves, F. W. (1982) *The Secret History of the Mongols*. Harvard University Press.
- 道布編著(1983)『蒙古语简志』民族出版社.
- Dede, Keith. (1999a) "An Ablative Postposition in the Xining Dialect." *Language Variation and Change* 11, Cambridge University Press, pp.1-17.
- (1999b) *Language Contact, Variation and Change: The Locative in Xining, Qinghai* (ワシントン大学博士論文).
- 都兴宙(1995)「论西宁话里的虚词“lia”」『青海民族学院学报(社会科学版)』1995-4, pp.37-43.
- 橋本萬太郎(1989)「中国語」『言語学大辞典』第2卷, 三省堂, pp.892-906.
- 贾晞儒(1990)「对河湟汉语几个语法现象的分析」『青海民族学院学报(社会科学版)』1990-4, pp.37-43.
- (1991)「青海汉语与少数民族语言」『民族语文』1991-5, pp.5-12.
- 角道正佳(1990)「土族語の一方言—Aus die Volksdichtung der Monguor の言語—」『内陸アジア言語の研究』VI, pp.179-200, 神戸市外国語大学外国学研究所.
- 金文京・玄幸子・佐藤晴彦訳注(2002)『老乞大』(東洋文庫 699), 平凡社.
- 李克郁(1987)「青海汉语中的某些阿尔泰语言成分」『民族语文』1987-3, pp.27-31.
- 李炜(1993)「甘肃临夏一带方言的后置词“哈”“啦”」『中国语文』1993-6, pp.435-438.
- 李逸友編著(1991)『黑城出土文书(汉文文书卷)』科学出版社.
- 刘照雄編著(1981)『东乡语简志』民族出版社.
- 马树钧(1982)「临夏话中的“名+哈”结构」『中国语文』1982-1, pp.72-73.
- (1984)「汉语河州话与阿尔泰语言」『民族语文』1984-2, pp.50-55.
- 敏生智(1989)「汉语青海方言与藏语安多方言」『青海民族学院学报(社会科学版)』1989-3, pp.78-87.
- 宮紀子(2002)「大元ウルスの言語資料と出版文化」(京都大学博士論文).
- 太田辰夫(1954)「漢兒言語について - 白話發達史に関する試論 - 」『神戸外大論叢』5-3, pp.1-29(『中国語史通考』白帝社, 1988, pp.253-282 に再録).
- 小澤重男訳(1997)『元朝秘史(上)(下)』岩波文庫.

- 田中謙二(1962)「元典章における蒙文直譯體の文章」『東方學報(京都)』32, pp.187-224, 京都大學人文科學研究所( 増補して『校定本元典章刑部第一冊』付録『元典章の文章』京都大學人文科學研究所, 1964, pp.47-161. 及び『田中謙二著作集』第二卷, 汲古書院, 2000, pp.275-370 に再録).
- 王培基・吳新华(1981)「关于青海口语语法的几个问题」『中国语文』1981-1, pp.50-53.
- 王森(1991)「临夏方言“是”字的用法」『方言』1991-3, pp.204-205.
- 王森・趙小刚編(1997)『兰州话音档』上海教育出版社.
- 謝曉安・華侃・張淑敏(1996)「甘肃临夏汉语方言语法中的安多藏语现象」『中国语文』1996-4, pp.273-280.
- 亦邻真(1982)「元代硬译公牍文体」『元史论丛』1, pp.164-178.
- 張成材編(1994)『西寧方言詞典』江蘇教育出版社.
- 照那斯图編著(1981)『土族語簡志』民族出版社.
- 中国社会科学院和澳大利亚人文科学院合編(1987)『中国语言地图集』Longman(朗文出版).

## 付録1 擬蒙漢語文獻毎の格標示法一覽

先行研究では一括りに扱われてきた擬蒙漢語文獻であるが、実際には文獻毎に言語特徴に「量的な」差が見られる。付録1では各文獻の格標示法について数値を挙げておく(以下表中では『通制』=『通制條格』, 『直解』=『孝經直解』, 『秘史』=『元朝秘史』, O=目的語, (+後置要素)=「後置要素の付加は任意」)。

表 1-1) 与位格標示法 目的語=場所

|             | 『通制』 | 『直解』 | 『秘史』 | 『老乞大』 |
|-------------|------|------|------|-------|
| 介詞+O(+後置要素) | 10   |      | 55   | 45    |
| O+裏         | 129  | 1    | 2    | 23    |
| O+内         | 5    |      |      |       |
| O+處         |      |      | 2    |       |
| O+上         |      | 1    |      |       |

表 1-2) 与位格標示法 目的語=場所以外

|             | 『通制』 | 『直解』 | 『秘史』 | 『老乞大』 |
|-------------|------|------|------|-------|
| 介詞+O(+後置要素) | 7    | 5    | 93   | 1     |
| O+根底        | 161  | 4    | 1    | 2     |
| O+行         | 1    |      | 8    | 1     |
| O+根前        | 2    |      | 3    |       |
| O+裏         | 54   |      | 6    | 5     |
| O+處         | 1    |      | 12   |       |
| O+中         |      | 1    |      |       |

表 2-1) 対格標示法 目的語=人を表す語

|           | 『通制』 | 『直解』 | 『秘史』 | 『老乞大』 |
|-----------|------|------|------|-------|
| 介詞+O      | 9    | 6    | 217  | 4     |
| 介詞+O+後置要素 | 2    |      | 1    |       |
| O+根底      | 43   | 3    |      |       |
| O+行       |      |      | 16   |       |

表 2-2) 対格標示法 目的語=人を表す語以外

|      | 『通制』   | 『直解』 | 『秘史』   | 『老乞大』 |
|------|--------|------|--------|-------|
| 介詞+O | 18     | 9    | 113    | 5     |
| O+根底 | 3(無生物) |      |        |       |
| O+行  | 1(有生物) |      | 2(有生物) |       |

表 3-1) 奪格標示法 場所的

|             | 『通制』 | 『直解』 | 『秘史』 | 『老乞大』 |
|-------------|------|------|------|-------|
| 介詞+O(+後置要素) | 16   | 2    | 64   | 8     |
| O+根底        | 10   |      |      |       |
| O+裏         | 11   |      | 3    | 3     |
| O+内         | 17   |      | 2    |       |
| O+裏頭        | 2    |      |      | 2     |
| O+行         |      |      | 2    |       |

表 3-2) 奪格標示法 時間的

|             | 『通制』 | 『直解』 | 『秘史』 | 『老乞大』 |
|-------------|------|------|------|-------|
| 介詞+O(+後置要素) | 11   |      | 10   | 7     |

表 4-1) 造格標示法 道具・手段

|      | 『通制』 | 『直解』 | 『秘史』 | 『老乞大』 |
|------|------|------|------|-------|
| 介詞+O | 1    |      | 18   |       |
| O+裏  | 9    |      |      |       |

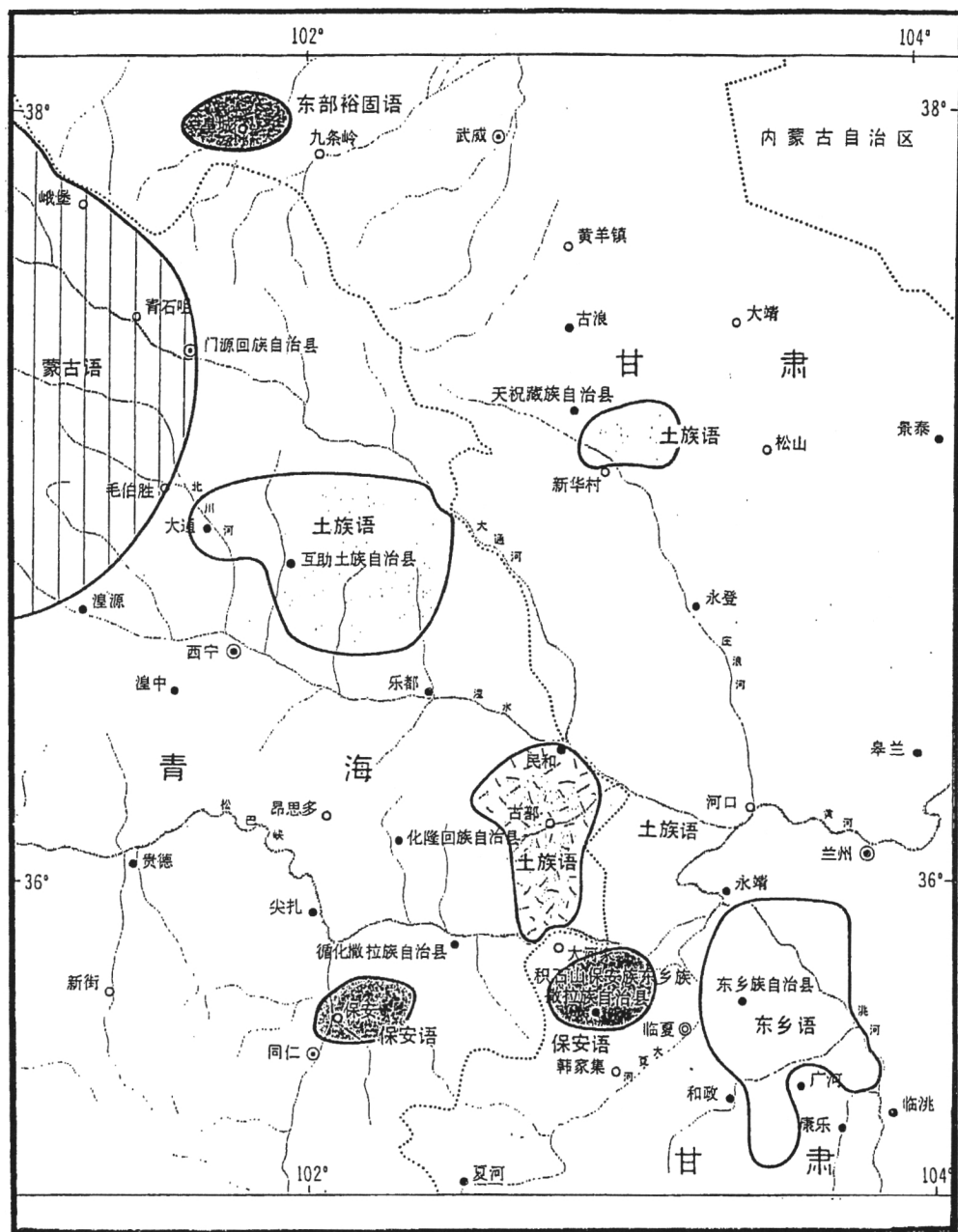
表 4-2) 造格標示法 依拠

|        | 『通制』 | 『直解』 | 『秘史』 | 『老乞大』 |
|--------|------|------|------|-------|
| 介詞+O   | 104  | 3    | 14   | 7     |
| 介詞+O+裏 | 39   | 1    |      | 1     |
| O+裏    | 6    |      |      |       |

表 5) 共同格標示法

|           | 『通制』 | 『直解』 | 『秘史』 | 『老乞大』 |
|-----------|------|------|------|-------|
| 介詞・接統詞    | 47   | 2    | 91   | 9     |
| 介詞+O+後置要素 | 1    |      | 2    |       |
| O+根底      | 10   |      |      |       |

付録2 青海・甘肅地方の言語地図



(中国社会科学院和澳大利亚人文科学院合編(1987)より)

## 元代“拟蒙汉语”与 现代青海甘肃方言 \*

川澄 哲也

### 摘要

在几个元代文献中,出现了语法结构跟蒙古语相似的汉语。笔者把这种汉语叫做“拟蒙汉语”。

过去有许多学者对“拟蒙汉语”的性质发表过各自的见解。但是,他们得出的结论并不一致,有的学者说“它是元代中国北方的口语”、有的学者认为“它只不过是元代公文中出现的翻译文体”。

为了探明元代“拟蒙汉语”的性质,本文通过将其跟现代汉语中青海甘肃方言的类型比较,发现两者之间存在着以下几个共同点:

- 有很多“宾一动”句子
- 用后置要素来表示各种“格”关系
- 否定词紧接动词和形容词,程度副词或其他状语远离中心词语
- 表达“存在”时,在处所名词后用动词“有”
- 复数标识不但可以用在人称代词之后,还可以用在普通名词之后

这些现象都可以解释为:是由于语言的接触而产生的语言变化。

除了本文中提到的几个“间接证据”以外,还参考了内蒙古黑城出土的私信文书。在几封私信中,也有用后置要素来表示“格”关系的句子。

通过这样较全面的研究,我对“拟蒙汉语”的性质提出了以下的见解:

“元代‘拟蒙汉语’是经过语言接触而产生并实际存在的口头语言。”

\*题目中的“拟蒙汉语”是太田辰夫先生说的“汉儿言语”和亦邻真先生说的“硬译公牍文体”两种名称的总称。

(受理日 2003 年 7 月 21 日 最終原稿受理日 2003 年 12 月 22 日)